

令和7年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：札幌地区
- 2 事例報告学校名：札幌市立芸術の森小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 首藤 功二
- 4 キーワード：地域とつながり続ける学校

1 はじめに

本校は、札幌市の南区に位置し、豊かな自然に囲まれた恵まれた学習環境を特徴としている。常盤小学校と石山東小学校が統合し、今年度で開校5年目を迎える新しい学校である。今年度は特別支援学級の6学級を含め、全18学級、在籍児童は460人と札幌市では中規模校にあたる。豊かな自然に囲まれる環境と同時に、周囲には芸術の森美術館や札幌市立大学などがあり、地域にある施設と連携をしながら教育活動を進めている。本校の校章デザインも市立大学の学生がアイデアを出し、開校当時の児童の投票で決定している。



2 「自信」と「相手思い」があふれる学校へ

令和7年度の学校経営方針を「自信と相手思いがあふれる学校づくり」とし、様々な教育活動に取り組んでいる。子どもたちが自身の可能性を信じ、積極的に挑戦する「自信」を育むこと、そして、他者の気持ちを理解し、尊重し、協力し合う「相手思い」の心を養うことを重視している。こうした子どもの姿を教職員と共通理解し、「子どもが通いたい学校づくり」「地域の方や保護者が通わせたい学校づくり」「教職員が働きたい学校づくり」という三つの目標を掲げ、教育活動の充実と地域連携の強化を推進している。

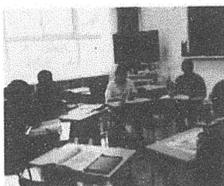
3 「地域」との連携を大切にしたい学校づくりへ

(1) 幼保小のつながり

校区にある「ときわみなみ子ども園」から新1年生の多くが入学してくる。そこで、次年度の新1年生と6年生である、年長と5年生の交流を総合的な学習の時間に行っている。5年生は、遊びの企画や実施を通じて、幼い子への関わり方や声かけの工夫を学び、思いやりや責任感を育んでいる。入学を控えた園児たちにとって、身近な「お兄さん・お姉さん」との交流は、小学校生活への不安を軽減し、親しみや期待感を抱く大きなきっかけとなった。また、園の職員との交流や授業参観の機会を設け、学校での生活や学習の様子を把握できる機会を増やした。密接に連携することで、入学後の安定した学校生活のスタートにつながっている。

(2) 小中一貫した教育

本中学校区は、小学校1校と進学先の中学校が1校である。位置的にも小・中学校間の距離が近く、校種間の連携を密に行いながら義務教育9年間を見通した小中一貫教育を推進している。小・中学校の教職員が定期的に合同研修会を開催したり、小・中学校の教員が互いの授業を参観する機会を設けたり、学習内容や発達段階に応じた指導方法について情報交流を行うことで、地域の子どもたちへの共通認識を深めている。小学校と中学校の連携により、進学時の不安が軽減され、子どもたちは安心して新しい環境に适应することができ、不登校などの未然防止にも繋がると考えている。



(3) 地域と連携した総合的な学習の時間

① 「石山（札幌）軟石」を活用

地域の歴史的・文化的な資源である「石山軟石」をテーマとした総合的な学習の時間を展開

している。子どもたちが軟石の歴史、特性、活用方法を学び、自分たちの身近にある地域資源に興味関心を高めることを目的としている。実際に札幌軟石に触れたり、ゲストティチャーのお話を伺ったりしている。「石山軟石」という地域資源に直接触れ、その歴史や価値を深く学ぶことで、地域への関心が高まり、地域の文化や郷土に対する誇りや愛着を育んでいる。

② 「市立大学」と連携

札幌市立大学の教員を招き、地域の公園の機能、デザインの役割について学んでいる。実際に地域の公園を訪れ、利用者の視点から改善点や新たな可能性を考え、学んだ知識を基に「自分なりの公園デザイン」を企画・提案する。この活動を通して、デザインの重要性や、地域住民のニーズを反映した公園づくりの難しさを学ぶと同時に身近な自然に触れ、生き物の多様性や環境の仕組みを学ぶことで自分たちの住む地域の自然環境に対する理解と愛着を深めている。

③ 「芸術の森美術館」をフィールドに

札幌芸術の森美術館や野外彫刻美術館など地域の施設と連携し、本物の芸術に触れる機会を取り入れている。野外美術館の作品について特徴を調べながら、作品のもつ面白さについて自分なりに気付きを得ている。美術館を利用し、本物に触れる校外での活動は子どもたちが視野を広げる機会となっている。

④ 6年生の総合的な学習の時間「ゆめ時間」

「地域学校協働活動推進事業」の一つとして、子どもたちのキャリア形成を支援する取組を行っている。将来の夢や目標を具体的に描けるよう、様々な職業に触れる機会を提供し、子どもたちは多様な価値観に触れながら将来の選択肢を広げるきっかけを得ている。建築士、美容師、エンジニア、音楽家などが講師となり、やりがい、苦労話、そして「なぜその仕事を選んだのか」といった個人的なストーリーを子どもたちに語りかける。講師となった大人自身も自らの職業に対する熱い思いを再認識するすてきな時間となっている。

4 地域とつながる

「おはよう」「いってらっしゃい」などの温かい声かけは、子どもたちに安心感を与え、地域に見守られているという意識を育む。毎朝交通量の多い交差点には、スクールガードの皆さんが活動してくださっている。開校時のスクールガードさんをご近所の方や地域のお知り合いに声をかけ、今では、少しずつ見守りの人数が増えてきている。曜日による見守りのシフト表も自分たちで作成してくださっているなど、地域住民の方が互いに声を掛け合い、「見守りの輪」が広がっているこの地域に心から感謝している。子どもたちが安全で安心して成長できる地域社会とは、こうした温かい人間関係から生まれるものだと思う。この地域で育つ子どもたちが地域への愛着を深め、自分たちが地域の一員であるという自覚を育み、将来「見守りの輪」を広げてほしいと願っている。

5 おわりに

保護者・地域の方々「通わせたい学校」を目指し、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を担い、協力し合う「地域とともにある学校づくり」を一層推進していくことが不可欠である。地域社会の持続可能な活性化と、未来を担う子どもたちの健やかな成長を両立させるため、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を認識し、強固なパートナーシップを築くことができるよう今後も「地域とのつながり」を大切にしていきたい。

